聖霊降臨後第２３主日　　２０２４年１０月２７日

風のように

甘木教会

牧師：竹田孝一

なお道を進まれるイエスに従った。
マルコ１０：５２

【説教要旨】「希望をもって　安心、立つ、前進」

私たちルーテル教会は、2017年10月31日、宗教改革500年を迎えました。507年目の宗教改革日にご一緒に甘木教会で礼拝を守れるなど思いもしていませんでした。すべてに時がありますね。感謝いたします。

聖書の日課に目を向けましょう。盲人、バルティマイは、目をイエスに癒されました。「**見えるようになり**」とあるように、この人はまず何を見たのでしょうか。おそらく、彼が視力を回復して、見たのは自分の前にいらっしゃるイエスさまだったと思います。私たちの前にイエスさまが立っておられる、私たちはこのイエスを見る、ここからすべての日々が始まります。これが、私たち信仰者の基本です。

「まぶね」という由木康の有名な讃美歌があります。ここで、「この人を見よ」と繰り返し歌われます。私たち信仰者の人生という道は、繰り返しイエスさまを見て歩んでいくことではないかと思います。

しかし、教会の歴史の中で、私たちの人生の歩みの中においてもイエスさまを見ずして、暗闇の中を歩んでいるときがあります。私たちは時には、イエスさまが見えなくなる、そういうときもあります。

しかし、聖書が教えるのは、ただひたすら、私たちの道の前

に立つイエスさまがおられるということです。イエスは私たちのところにいつも歩み寄られています。私たちが越えられないような壁を打ち砕いてくださるためにいつも私たちとともに歩まれています。

「**エリコの町に着いた**」、これはヨシュアを思い出します。堅固のエリコの城壁は、なかなか落ちず、まったく、歯の立たない状況にありました。しかし、主の箱を前に進んだユダの民は城壁を七日目に、「城壁は崩れ落ちた」のです。神が、イエスさまが前にいるとき難航不落の城壁も、崩れ落ち、道が開かれるのです。

今、この盲人を捕らえて萎縮させているのは目が見えないという壁です。それが彼を捕らえて彼を不幸にしていたと彼は思っていました。しかし、彼は聴覚があった、この恵みに今、気づこうとしているのです。「**ナザレのイエスだと聞くと**」。彼はイエスの訪問を聞く、そしていつもの雑踏、足音と違うことが耳で分かったのです。

「**ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください**」と口が開く恵みに気づき始める。だから誰よりも大きな声で、叫んだのです。今、この盲人を捕らえて萎縮させているのは目が見えないという壁と同時に聞き、叫ぶという自分の能力を使い、萎縮された心も、体も解放させられようとしているのです。

人の静止を振り払って、イエスに憐れみを叫び、願ったのです。いまや彼は日々の糧の物乞いでなく、自分を本当に生かすものへの物乞いへと向かったのです。ルターの有名な死ぬ２日前の言葉、「我々は乞食である。それは真だ。」とあるように、イエスの恵みを求めて物乞いしたのです。

私たちが求めるもの、それは金、銀、地位、知識、名誉、ではなく、「イエスの憐れみ」です。ここに私たちのすべてがあるのです。信仰者の道は、イエスの憐れみを請う生涯です。ルターの言う、「神の乞食」として生きていくことです。長い信仰の生活において、イエスを見、イエスに憐れみを求めていく、これがイエスに従うことです。この**なお道を進まれるイエ**

スに従ったバルティマイは、さらに何を見たのでしょうか
宗教改革記念日に読まれる、あるいは交読される詩篇46篇の「必ずそこにいまして助けてくださる」という言葉を、左近淑先生は、「詩篇研究」という本で、ここを「**ご自分を確かに現わされる方**」と訳しています。

「**ご自分を確かに現わされる方**」は、人を通して、その心を伝えるのです。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」と。「お呼びだ。」とイエスの招きの声を聞くのです。「こどもをまねく　友はどなた　こどものすきな　イエスさまよ」とこども讃美歌にあるように。私たちはイエスさまに招かれている存在です。この招かれるイエスさまにひたすら求めていく、「先生、目が見えるようになりたいのです」という神への信頼こそが私たちを救うのです。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

ここで「来なさい」と言わずに「行きなさい。」という言葉です。私たちが行くところ、神の救いがあるのです。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」という方、イエスがおられるからです。「«共にいます神»の臨在によって（危機と苦難が）安心に変わるのがイスラエルの信仰である。」なのです。

「なお道を進まれるイエスに従った」という言葉をフランシスコ会訳聖書は、「イエスの道中に従った」とあります。「イエスの道中」、イエスの歩まれる道の中を歩むのです。絶望の中にあった十字架の中でも、復活の勝利をある。安心し、立ち、前に進む自分とされることです。ルターは、彼の紋章の説明で次のように言っています。「第一は十字架です。　十字架につけられた方を信じる信仰が私たちを救うことを思い起こしたいのです。なぜなら、人が心から信じるならば、義とされるからです。・・・十字架は殺すのでなく、生かすからです。義人は信仰によって、それも十字架につけられた方を信じる信仰によって生きるのです。」今、私たちは、希望をもって、安心し、立ち、前に歩めます。「イエスの道中」を。

日毎の糧

46:2 神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。
46:3 わたしたちは決して恐れない／地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも　46:4 海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えるとも。〔セラ
46:5 大河とその流れは、神の都に喜びを与える／いと高き神のいます聖所に。 46:6 神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。夜明けとともに、神は助けをお与えになる。

詩篇４６：２―６

ルターの言葉

剣は何の忠告も助力も出来ず、またすべきでなく、神のみがあらゆる人の思い煩いと関与を超えて働かれるにちがいありません。　『慰めと励ましの言葉　マルティン・ルターによる一日一生』湯川郁子訳　徳善義和監修　教文館

神の臨在

「必ずそこにいまして助けてくださる」という表現は、詩編46篇の独自です。左近淑先生は、「詩篇研究」という本で、ここを「**ご自分を確かに現わされる方**」と訳しています。

天地がひっくり返るような危険な時にも、ご自分を確かに現わされ、助けてくださる神こそ、私たちの神であると信じ、それゆえに「わたしは決して恐れない」と信頼表明をするのです。

「«共にいます神»の臨在によって（危機と苦難が）安心に変わるのがイスラエルの信仰である。」、「信頼を支える根拠は«神います»という生ける神の臨在である。」とも言われます。

「夜明けとともに、神は助けをお与えになる。」と、信頼こそ次への希望を確かにしていきます。

祈り：神よ、夜明けとともに助けてくださることを信じ、日々を大切にしていく心を与えてください。アーメン。

牧師室の小窓からのぞいてみると

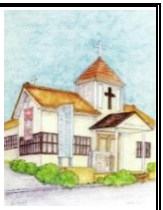
人との出会いがあり、別れもある。Ke 子さん（k 牧師夫人）が天に召された。先生夫妻は、がニューヨーク・ユニオン神学校の勉学を終えられて、帰国された。お子さんらは、小学校、幼稚園であったと思う。教会学校にみんなが来てくださり元気な子どもたちはそれぞれ性格があって、教会学校を豊かにしてくださった。そこにはいつもニコニコされた ke 子さんがいた。ある日、夏季学校のキャンプファイアーの準備しているとき、お子さんが来た。「お前のおやじ、働かせすぎ。ビールでももって来い」と冗談でいったのだが、本当にビールがやってきた。先生が学長されてもいつも目立たず支えておられた方であったので、きっとニコニコ笑ってビールを息子さんに持たせたのではないだろうか。ビールのうまさとビールの瓶のむこうにあるニコニコした温かさがあった。

天に帰られる一年前か、電話がかかってきた。「竹田さん、主人にすすめてくださらない。この頃、主人、足腰が弱くなっているので心配で、竹田さんが行っているストレッチにいくように、お願いします。」。お会いしてから、初めての電話であったと思う。びっくりし、先生に何かがあるのだろうと思っていた。その後、先生がなかなかいかないのでお灸とそのツボの本を送った。「家内が『合谷』に慣れてきて、揃って治療してくれています。間も無く次のステップへ進むでしょう。「足３里」は有名なやつですね。」と先生からメールが帰ってきた。　いつも主人思いの ke 子さんに栄光あれ。

園長・瞑想？迷走記

羽村幼稚園の１０月・理事会、評議員会であった。少子化の逆風の中でどう幼稚園を整えていかということに全力を傾けている。しかし、理事会、評議員会はあくまで現場の保育、教育が、つまり子どもたちがいかに安心して幼稚園で過ごせるかという制度を整えていくことであることを決して忘れてはいけないと思っている。子どもの見える会でありたいとう思う。

甘木通信



よく息子から「こんな家に生まれたくて、生まれたんじゃない」と言われた。自分はいつも子どものころからそう思って生きてきたので、心でそうですねと思う人生が私にもあった。

「父の詫び状」という向田邦子の自伝エッセイがある。その中で父親と祖母の関係が書かれていた。

「母が嫁いできてからも、色気沙汰のあった祖母である。・・・好きな人には、自分の気持ちを押さえることが出来ず、あとさき考えなくてそれを先にしてしまう。あとから、倍の苦労がくることを考えないところがあったらしい。

長男である父はそういう母親を最後まで許さず、扶養の義務だけは果たして、死に水取ったが、終生、やさしいい言葉をかけることをしなかった。祖母も期待はしなかったろう。そういうあきらめのいいところがあった。」とある。これに近い母子関係が我が家にもあったが、向田さんの父親と長男である私の兄の違いは、母親も最後までわがまま放題で、出来た兄はそんな母親を最後まで大切に世話をし、看取った。許したかどうかは分からないが、生涯、独身で家庭を築いていない。頭が良く、子どもの扱いも上手い兄であるのでどんな家庭を築いていたのだろうか思うとき、何か思う所があったのかもしれない。兄も「こんな家に生まれたくて、生まれたんじゃない」という気持ちがあったのだろうか。しかし、高齢になり、「こんな家に生まれたから、今の自分がある」と、人生を面白く思えるようになった。すべてに場所、時があると思えるようになった。

（甘木日記）土）日善幼稚園の運動会。甘木への出発は夜になる。日）順延された甘木・聖和幼稚園の最後の運動会。園長の家族が来られ、準備。感謝。信徒さんが家内の誕生日祝いに礼拝後、小石原へ連れていってくださる。月）主管牧師より家内に誕生日プレゼントいただく。代休で夕刻二人でショッングセンターへ。火）東京へ。鬱で会社を休んでいる友人を訪問。会社復帰。万歳。水）羽村幼稚園の管理者会議。木）理事会、評議員会。夜の飛行機に飛び乗ろうとしたら一ケ月後の予約であった。一枚だけ残っていた切符を購入。やれやれ。金）芋ほり遠足。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人（牧師）もいますが。

土）体育館で、日善幼稚園の運動会。雨天に左右されずに出来るが、やはり青空のもとで運動会はしたい。大きな雷の響く、大雨。そのために甘木・聖和幼稚園の運動会は中止。運動会が終わるころは雨があがっていた。用具をかたづけて、夜に甘木教会へ向かう。よくも体が動く。日）昨日、順延された甘木・聖和幼稚園の最後の運動会。朝早くから園長の家族が来られ、準備してくださる。感謝。礼拝前の運動会を見る。温かい心のある運動会。礼拝中も運動会の歓声が聞こえてくる。これも愉しい。礼拝後、信徒さん姉妹が家内の誕生日祝いに小石原の美味しいイタリアンレストランへ連れていってくださる。炭鉱後を見学。福岡に帰っ

来たと感じる。月）幼稚園の代休。日田での理事会を終わった主管牧師が訪問くださり、家内に誕生日プレゼントを届けてくださる。夕刻二人でショッングセンターへ行く。ゆっくりとした一日。火）園の仕事を終えて、羽村幼稚園の理事会。評議員会のため

に東京へ。鬱で会社を休んでいる友人を訪問。会社復帰が決まる。短いようで長かった。万歳。パソコンを開けてメールを見ると多く支えられた ke 子さんが召天されたと聞く。あの笑顔に会えないかと寂しくなる。我ら天に国籍があり。水）明日の理事会、評議員会の準備の羽村幼稚園管理者会議。終わり、東京に出てきたばかりの時にお世話になった方のお礼を込めて誕生日の食事会をする。N牧師の召天を聞く。最近、天に帰られた奥様を追うように。牧師らしい牧師であった。財務の色々をアドヴァイスをいただいた。お金という生々しいものを扱いながら、いつもそこには神の愛が示された。また心に穴が開いた。お世話になりっぱなしだ。木）理事会、評議員会が終わり。夜の飛行機に飛び乗ろうとしたら予約のした切符が一ケ月後のものであった。「切符が残っていますか」と聞くと「一枚だけ残っている」と。即座に切符を購入。やれやれ。こういうことが増えてくるのだろう。帰り、事務処理。主日の準備をする。を越すが、全部が出来ていない。金）早朝に起きて残りの書類を作る。早く幼稚園に行き、「園だより」を作る。芋は

児が掘った畑を鍬でもう一度、掘り起こす。そういえば、大もやっていたと思い出す。帰り、「園だより」作成、来週の打ち合わせをすると夕刻。帰り、宗教界記念日の午後、ブラジル式の焼き肉をするので、肉を購入にいくが、上手くいくか不安である。今週も精一杯、走った。後がない。